

## 身体経験に基づいた文法研究の可能性

Langacker の認知文法では、言語それ自体の問題とそれを使用する言語主体の問題とを切り離すことは不可能であると考え、認知主体の認知能力に基盤を置いた理論構成物を用いた言語現象の包括的な記述に務めてきた。しかしながら、認知文法の理論構成物は非常に記述力が強いいため、自らの仮説を実証しようとする態度を削いでしまうこともある。

このような問題意識に基づき、本研究では、言語事実に即した実証的な研究を行う。その際、特に、言語使用の現場(usage event)における認知的要因に焦点を当て、認知主体の身体経験という観点から言語の包括的な記述を試みる。各発表は次の通り。

### ① 日本語の類別詞の本質—言語話者の視点構図とモノの認識—

英語では可算名詞の複数形が発達しているが、日本語では未発達であり、その代りに類別詞を発達させている。その原因は、英語話者は集合を「離散的スキーマ」(山梨 2000)で認識し、個々の成員に注目する傾向があるのに対して、日本語話者は集合を「統合的スキーマ」で認識するため、認知主体が個々の成員を数えるときには、集合の中から成員を取り出すという認知操作(つまり、類別詞による成員の取り出し)が必要なためであると考えられる。本研究では、複数形が発達・未発達と類別詞の豊かさの関係が日英語話者の事態把握における視点構図とそれに関わる認知操作の違いから原理的に説明できることを主張する。

### ② エスキモー語の名詞機能にみられる知覚と認知の平行性について

本発表ではエスキモー語の名詞表現、特に数に関するマーキングと指示代名詞の使用を例に Langacker の視覚と知覚の平行性に関する主張をサポート・精緻化することを目的とする。具体例としては、以下のような例をもとに議論を進めていく。(I) エスキモーでは単数・双数・複数の区別が名詞(と動詞)において義務的である。では「足/手をけがをした」という場合、「足」や「手」はどのような数のマーキングを受けるだろうか。もちろん、傷がすね・腕の部分にある場合、手や足は単数で表示されるが、けがの部分が『指』に近くなると両者は複数で表示される傾向を示す。(II) エスキモー語では西洋語でいうジェンダーのカテゴリーを指示詞の体系で発達させているが、同じ対象物であっても場面によってそのジェンダー・マーキングが変わってくるという点で西洋語のそれと大きく異なる。例えば同じ鳥であっても、木の上で静止している場合、上空を飛んでいる場合、鳴き声だけが聞こえている場合ではマーキングをかえなければならない。(I)と(II)の具体例を通じて理解される興味深い事実は、エスキモー語では、プロフィールとスコープの関係において、スコープはその場の視覚的な視野・スコープに大きく依存して言語化がなされるということである。『慣習化の程度差』をキーワードにエスキモー語と西洋語の名詞文法マーキングに関する対照分析を提案する。

### ③ 身体的経験者と観察者—ステージモデルの限界—

表面上の形式が同じでも移動体異なる場合がある。(1a)では *tr* が移動体であり、(1b)では、主体的に把握された認知主体が移動体である。興味深いのは、(1c)に示すように、この認知主体を言語化した場合、移動体が *tr* であるという解釈が強くなることである。

- (1) a. 太郎がだんだん近づいてくる。  
b. 富士山がだんだん近づいてくる。  
c. 富士山が私にだんだん近づいてくる。

本研究では、視点者としての認知主体という従来のモデルに対し、環境との相互作用をす  
る経験者としての認知主体を想定することにより、いくつかの言語現象の包括的な記述モ  
デルを提案したい。

### ④ 前置詞の文法的振る舞いと身体的な基盤—境界性と接触性に注目して—

人間は身体経験を通じて垂直軸を非対称的に概念化する。この非対称的な空間認知が、  
垂直軸上で対となる英語の前置詞 (*up down, over under* など) の非対称的な文法的振舞い  
を動機づける。例えば、(2a)と(2b)の前置詞句主語構文の容認度の違いは、現実世界におけ  
る前置詞句が表す空間の境界性を反映する。

- (2) a. *Under* the bed is dark.  
b. \* *Over* the bed is dark.

本発表では「境界性」と *TR/LM* 間の「接触性」に注目して、上下に関する非対称的な身体  
経験が、反意的な前置詞の非対称的な文法的な振舞いを動機づけると主張する。

以上本研究では、言語使用の現場において頻繁に生じている認知的要因を明らかにし、  
認知主体の身体経験を組み込んだ文法構築の可能性を議論したい。その際、認知文法の仮  
説をどのように検証したらよいのかという方法論上の問題も議論する予定である。

#### 参考文献

- Aikhenvald, Alexandra, Y. (2003) *Classifiers A Typology of Noun Categorization Devices*, Oxford  
University Press, Oxford.
- Allan, Keith (1977) "Classifiers," *Language*, 53, 285-309.
- 濱田英人 (2011) 「言語と認知 — 日英語話者の出来事認識の違いと言語表現」『函館英文学』  
第 50 号, 函館英語英文学会, 65-99.
- 本多 啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会, 東京.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English  
Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

- 今井むつみ (2010) 『ことばと思考』 岩波新書, 東京.
- 井上京子 (1998) 『もし「右」や「左」がなかったら 言語人類学への招待』 大修館, 東京.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』 大修館, 東京.
- Kuroda, Shigeyuki (1973) “Where Epistemology, Style, and Grammar Meet,” Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart and Winston, New York, 377-391.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, Ronald W. (1985) “Observations and Speculations on Subjectivity,” John Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*, John Benjamins, Amsterdam, 109-150.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image and Symbol*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Langacker, Ronald W. (1993) “Reference-Point Constructions,” *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- Langacker, Ronald W. (1998) “On Subjectification and Grammaticization,” Jean-Pierre Koenig (ed.), *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, CSLI Publications, Stanford, 71-89.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton du Gruyter, Berlin.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, New York.
- 町田 章 (予定) 「主観性と見えない参加者の可視化－客体化の認知プロセス－」『日本認知言語学会論文集』 12 巻.
- Matsumoto, Yo (1996) “How abstract is Subjective Motion? A Comparison of Coverage Path Expressions and Access Path Expressions,” Adele E. Goldberg (ed.) *Conceptual Structure, Discourse and Language*, CSLI, Stanford, 359-373.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」坪本篤朗 (他編) 『「内」と「外」の言語学』 開拓社, 東京, 353-393.
- 大谷直輝 (2012) 「“John walked over/under the bridge” に関する一考察 —文法の身体的な基盤と百科事典的意味—」『言語研究』 141, 47-58.
- Otani, Naoki (2012) *A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions*, Kyoto University, dissertation.
- 澤田治美(編) (2011) 『主観性と主体性』 ひつじ書房, 東京.
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版, 東京.